サン＝テグジュペリの宗教性

浅岡 夢二

I　サン＝テグジュペリとキリスト教の関係

両親がともにカトリックだったために、サン＝テグジュペリは伝統的な宗教的雰囲気のなかで育てられた。しかし、それはあくまでも「雰囲気」にすぎず、幼少時においてカトリックの教えの内容がサン＝テグジュペリの内面に深い影響を与えることはなかったように思われる。サン＝テグジュペリが４歳の時に父親が亡くなったが、その後も、母親がサン＝テグジュペリに対して特別熱心に宗教教育を行なうことはなかった。

カトリックは、幼いサン＝テグジュペリにとっては、あくまでも、「外面的な規律」、「世俗的な習慣」、あるいは「伝統的な形式」にすぎなかったのである。

当時のサン＝テグジュペリを取り囲む宗教的雰囲気がどのようなものだったかを理解するには、次のような象徴的なエピソードを知るだけで充分だろう。

> ド・トリコー夫人は、夕食のあと、夕べの祈りをするために、家族全員が礼拝堂に集まることを義務づけていた。彼女自身、この儀式を早く終えたいと思っていたので、応接間を出るや否やすぐに歩きながら祈りを始めるのだった。家族は全員、しぶしぶ彼女のあとについていった。礼拝堂に入ると、彼女はいきなりひざまずいて勝手に祈り、祈りが終わると、他の人間のことなど一切お構いなしに再び立ち上がるのだった。（1）

ド・トリコー夫人というのは、父親の死後、サン＝テグジュペリが家族とともに過ごしたサン=モーリス・ド・ルマンの城館を取り仕切っていた伯爵夫人で、サン＝テグジュペリにとっては大叔母にあたる。

こうした厳格で尊大な大叔母とともに、毎晩、形式的な祈りをしていた子どもが、キリスト教の教えの本質的かつ神秘的な面に触れる可能性はまずなかったと言っていいだろう。

サン＝テグジュペリは、自身の子ども時代に関して数多くの証言を残しているが、その頃の自分とキリスト教の関係については、まったく何も語っていない。

ただ、思春期に達した１９１７年、サン・ルイ高等中学に在学中のある時期に、母親に宛てた手紙の中で信仰について語っている。とはいえ、その内容にしても、「ここでは、信仰のない者が信仰のある者たちを尊敬し、大事に思っているみたいです」（2）という程度のものにすぎない。そして、他者からどう見られるかだけを気にしている点において、むしろ、サン＝テグジュペリは、「信仰があっておとなしくても、おおむね習慣や家の伝統からそうしているだけ」（3）の人間である、という印象を与える。

また、彼は、この手紙の少しあとに書かれたと思われる手紙の中で、聖書について次のように語っている。

> 聖書をすこしばかり読みました。文体がなんとすばらしく、なんと力強い簡潔さをそなえていることでしょう。そして、しばしば、みごとな詩になっています。たっぷり二十五ページにわたる戒律は律法と良識との傑作です。いたるところに道徳の掟がその有用性と美とのなかで輝いています。じつに壮麗なものです。（4）

しかし、ここで特徴的なのは、聖書を教義や信仰の面から読んでいるのではないということだろう。むしろ、聖書を「文学」すなわち「詩」として、その文体に注目して読んでおり、また、精神的な面に関しても、せいぜい「戒律」、「良識」、あるいは「道徳」が問題になっているにすぎない。

この後、サン＝テグジュペリは、急速にキリスト教――すなわち、慈悲深い、善い神――から遠ざかっていくが、その理由として、アンドレ・ア・ドゥヴォーは次の６つを挙げている。（5）

１）１９０４年に父親が死去したこと。
２）１９１７年に仲の良かった弟が死去したこと。
３）１９１４年から１９１８年にかけて戦争が勃発し、サン＝テグジュペリに多くの苦しみを与えたこと。
４）ニーチェを読むようになったこと。
５）科学主義に染まり、キリスト教の教えが科学的真理と矛盾すると考えるようになったこと。
６）神学者たちの高圧的な口調が我慢ならなかったこと。

しかし、もともと、サン＝テグジュペリはキリスト教をそれほど熱心に信じていたわけではない。したがって、１）から３）までを、サン＝テグジュペリがキリスト教を否定するようになった理由として挙げることは不適切であろう。むしろ、４）から６）までを、それまでも本質的に関わっていなかったキリスト教から、さらに離れていく理由として挙げることには意味があると思われる。

ところで、それから２０年ほど経った１９３７年から３８年にかけて、キリスト教はサン＝テグジュペリにとって緊急な重要性を帯びてくる。

それは、次の三つのエピソードからうかがわれるだろう。(6)

まずは、ジョルジュ・ペリシエが伝える、１９３８年の、《パリの一夜》のエピソードである。その夜、サン＝テグジュペリはひどく気落ちして、真夜中に友人のペリシエに電話をかけてくる。ペリシエはサン＝テグジュペリに会うことにした。その時二人は、先ずカフェで、次に、右岸から左岸へ、左岸から右岸へと走り回るタクシーの中で話したのだが、ほとんどの時間、サン＝テグジュペリが一人で果てしなく話し続けた。彼は、不安のあまり、饒舌になっていたのである。彼が話したのは、絶対への渇望、神の探求についてだった。「もしぼくが信仰を持つことができたら、ドミニコ会に入るだろう。だけど、信仰なしにドミニコ会に入るわけにはいかない。そんなことをしたら、ひどいごまかしをしたことになるからね。だからぼくは絶望しているんだ。」

二つ目は、ルネ・ゼレールが伝えるエピソードである。同じく１９３８年頃に、サン＝テグジュペリは、非常に信頼のおける修道僧を紹介される。彼はその修道僧に会うために、ただちに列車に乗って地方の都市に向かった。彼に会えば自分が救われるのではないかと考えたからである。目指す駅に到着すると、その修道僧が運転するつつましい自動車が彼を待っていた。夜の９時に着いたサン＝テグジュペリは、それから翌日の午前６時まで、一晩中、神についてその修道僧と語り合ったという。

三つ目のエピソードは、ピエール・シュヴリエによって公開されたサン＝テグジュペリの手紙の一節によって知ることができる。その手紙は、サン＝テグジュペリがリヨンのフルヴィエール聖堂で経験したことを語っている。「その時、ぼくは自分が絶対船の中にいると感じていた。単旋律の聖歌、広がる海原、風をはらむ帆。ぼくは驚くべき確信を得ていた。それは、船のように、まっすぐ、どこかへ向かっていた。内陣には、旅人であるぼくと乗組員。そう、ぼくは密航者だった！ぼくは、自分がこっそりそこに忍び込んだという印象をいだいていた。ぼくは、

まさしく眩暈を感じていた。ある疑い得ない明証性がもたらす眩暈を。しかし、その明証性は時間の経過とともに曖昧になってゆくほかなかった。」

この時も、結局、サン＝テグジュペリはキリスト教会に復帰するには至らなかった。

こうして見てくると、サン＝テグジュペリが、組織宗教としてのキリスト教に、真の意味で属していた時期はなかったことがわかる。サン＝テグジュペリにとって、キリスト教は、耐用年数を過ぎ、有効性を失った、時代遅れの宗教にすぎなかったのである。彼にとって、「ローマ世界に生まれたキリスト教は、現代の知識の段階とはあい容れない、一文明に局限された一つの歴史的相対的真理にすぎないのに、永遠の絶対的真理として自己を主張している」（7）宗教のように思われたのである。

ただし、制度としての教会に属していなかったからといって、サン＝テグジュペリが宗教性を欠いていたかというと、そんなことはまったくない。サン＝テグジュペリは、同時代の他の人々と比べても、格別に、宗教の必要性、神の必要性を深く感じていたし、彼自身きわめて豊かな宗教性を具えていたのである。アンドレ-ア・ドゥヴォーも指摘するように、「サン＝テグジュペリが宗教性を失ったことはない」（8）たとえば、サン＝テグジュペリは神について、次のように言っている。

> 神以外のものから権威を引き出させることの困難を思うと、ぼくは慄然とする。（9）

そこで、我々は、ウィリアム・ジェイムズにならって、「制度的宗教」と「個人的宗教」を截然と切り離し、サン＝テグジュペリの宗教性を「個人的宗教」の側面から考察していきたいと思う。

ウィリアム・ジェイムズも主張しているように、宗教を扱う際に、「制度的宗教の分派をまったく無視し、教会組織のことには少しもふれず、組織神学や神々の観念そのものについてもできるだけ考察しないで、問題をできるだけ個人的宗教のみに限定」することは充分に可能だからである。

この場合の「個人的宗教」とは、「個々の人間が孤独の状態にあって、いかなるものであれ神的な存在と考えられるものと自分が関係していることを悟る場合だけに生ずる感情、行為、経験である」ということになる。（１０）

II　夢想

サン＝テグジュペリの宗教性を探るにあたっては、まず、彼が持っていた「夢想の力」に注目する必要があるだろう。サン＝テグジュペリが生来の夢想家であったことに関しては、多くの証言がある。

サン＝テグジュペリは９歳のときに、父親ゆかりの地であるル=マンに家族とともに転居し、この町の名門校である聖十字聖母学院に入るが、その学院でサン＝テグジュペリと同窓だったバルジョン神父は、当時のことを回想して次のように語っている。

> 彼はむしろ夢想家だった。あごに片手をあてがって、窓越しにさくらの樹を眺めている彼の姿が目に浮ぶ。（１１）

また、サン＝テグジュペリは、２６歳の時、ラテコエール航空会社に就職するために、空路開発営業主任であるディディエ=ドーラに面会しに行くが、この人間観察に秀でた慧眼の士は、一瞬で、サン＝テグジュペリが「夢想家」であることを見抜いている。

> まず第一に、その人間全体が、行動家であるよりも夢想家であることを示していた。（１２）

では、こうした夢想家としての資質はどのような時に発揮されたのだろうか？

特に目立つのは、生死の危機に臨んだ時に、夢想の力、ヴィジョンの力を発揮して、それらの危機を乗り越えたケースである。

たとえば、サン＝テグジュペリは、ある時、砂漠にたった一人で不時着し、武器もなく、不帰順民たちの襲撃の危険にさらされたことがある。どの飛行機からも発見されなければ、砂漠の中を、何日も、何週間も、何ヶ月も歩いて、人間たちの住んでいる場所にたどりつねばならなかった。まさに、絶体絶命の危機である。

> そこでは、わたしはこの世になにも所有していなかった。わたしは、ただ呼吸することの楽しさを自覚しているだけの、砂と星々のあいだに踏み迷ったひとりの人間にすぎなかった。
>
> ところがわたしは、自分が夢想に満たされていることに気づいたのだ。

それらは音もなく、泉の水のようにやってきた……
（中略）
どこかに、黒い樅と菩提樹にかこまれた庭園と、わたしが愛する古い家があった。その家が遠かろうと近かろうと、そんなことはどうでもよかった。また、それがわたしの肉体を暖めることも、かくまうこともできず、ここではただ夢の役割しか担ってくれなくても、そんなことはどうでもよかった。わたしのその一夜を現前で満たすためには、それが存在してくれていれば十分だった。わたしはもはや、砂地に座礁したその肉体ではなくなっていた。わたしは方向を持っていたし、その家の子どもだったし、その匂いの思い出、その玄関ホールの爽やかさ、かつてそれを賑わせていた声に満たされていた。（１３）

こうして「夢想」によって幼年時代を思い出すのだが、それらの映像はただ単に頭の中で再現されたのではなく、サン＝テグジュペリの意識の広がりの中にありありと「現前」したのである。そして、その世界の中に実際に入ることによって、サン＝テグジュペリは砂地に座礁した肉体ではなくなり、すっかり当時の子どもに戻る。そして、「保護」、「安全」、「平和」の感覚に満たされ、パニックに陥ることもなく、無事にその危機を脱することができたのである。
サン＝テグジュペリはこの時のことを次のように要約している。

夢想はひとつの奇跡だ。（１４）

なぜか？　それは、

わたしの夢想は、これらの砂丘、この月、これら眼前にあるものよりも現実だ（１５）

からである。

さらに別の時に、サン＝テグジュペリは、僚友のプレヴォーとともに砂漠に不時着し、前例の時と同様、絶体絶命の危機に陥ったことがある。

わたしたちは機体のそばに横になった。六十キロ以上も歩いてきたのだ。飲料もつきてしまった。東の方角にはなにも認められなかったし、救援機はこの

地域の上空を飛ばなかった。あとどのくらい生きていられるだろう？　もう喉はからからだ……。（１６）

ところが、そんな情況で、遠く離れところにいる妻の目が、意識の広がりの中に「現前」し始めるのである。

妻の目が見える。その目以外にはもうなにも見まい。その目は問いかけてくる。おそらくわたしのことを思っているはずのすべての者たちの目が見える。そして、それらの目が問いかけてくる。すべてのまなざしがひとつに寄り集まって、わたしの沈黙を非難している。わたしは答えている！　答えている！　全力をふりしぼって答えている。

（中略）

待っているあの目が見えるたびに、わたしは火傷のようなものを感じる。立ちあがって、まっすぐまえに走り出したいような衝動にとらえられる。かなたで人びとが救いを求めている。難破している！

（中略）

まっていてくれ……。いまゆくぞ！……いまゆくぞ！　わたしたちのほうこそ救援隊だ！（１７）

砂漠の中に難破して助けを求めているはずのサン＝テグジュペリが、「妻の目」の「現前」を契機として、まったく逆の立場に立つことになったのである。サン＝テグジュペリたちを失った人々こそ難破して救いを求めているのであり、それゆえにサン＝テグジュペリと僚友はその人たちを救いに行かなければならない。

こうして、サン＝テグジュペリとプレヴォーは大いなる勇気を得、不撓不屈の意志を発揮して、ついに砂漠を脱出することに成功する。

さらに、次に紹介するのはサン＝テグジュペリ最晩年のころ、偵察機に乗ってアラスの上空に行ったときのことである。

サン＝テグジュペリたちの偵察機がアラスの上空に差し掛かったとき、敵が高射砲を打ち始めた。いまにも高射砲の砲弾が機体に当たるかもしれないという緊迫した情況で、サン＝テグジュペリは、下に見える景色の中に文字通り入り込んでいく。

いまのわたしは、一種の親密さのなかを低空で飛んでいる。ぽつんと孤独な樹がある。小さな塊をなして群れている樹がある。（中略）たぶんプラムの樹だろうが、果樹がつぎつぎにつづいてゆく。わたしはその風景のなかに入りこむ。もう風防などおさらばだ！　わたしは塀を乗り越えた畑泥棒だ。濡れたうまごやしのなかを大股ですすんでゆき、プラムを盗む。（１８）

ここで、サン＝テグジュペリは、地上の風景を単に見ているだけではない。風防ガラスはもう存在していない。下界の風景は実際にサン＝テグジュペリの目の前に「現前」し、広がっており、サン＝テグジュペリはそのなかを「実際に」走っている。

一方で、また、サン＝テグジュペリは子ども時代の思い出の中に入り込んでいく。彼は子どものころ、夕立が来そうになると、仲間といっしょに《騎士クムラン》遊びというのをよくしたのである。それは、降り始めた雨のなかを駈けていって、雨に当たったものは「やられて」、雨に当たらずに家（＝焔の城）まで行きついたものが「神々の保護を受けた、不死身の勝者」になるというゲームだった。

サン＝テグジュペリはいつのまにか思い出のただなかにいる。

わたしたちは、庭のいちばん奥から、芝生のかなたにある家に向かって、息のつづくかぎり走り出す。夕立の最初の雫は、重くてまばらだ。はじめてそれに打たれた者がやられたと名乗りをあげる。ついで二番目。三番目。それから他の者が。（中略）わたしはまた、騎士アクランの遊びをやっているのだ。炎の城に向かって、ゆっくりと、息のつづくかぎり走っているのだ……。（１９）

ここで、サン＝テグジュペリは単に子ども時代を思い出しているのではない。その風景は、サン＝テグジュペリの眼のまえに「現前」しており、サン＝テグジュペリは実際にその風景のなかで生き、そして走っている……。

いま実際に目の前にあるものよりも、心の広がりの中にある「夢想」や「ヴィジョン」の方がはるかに「現実的」であり、それらはサン＝テグジュペリにとって確かに「現前」するものだったのである。彼は自分の肉体の限界を越えて、それらの「現前」の中に入り込めた。「夢想」や「ヴィジョン」は、「現実」以上に、サン＝テグジュペリに、行動の「動機」、行動するための「勇気」を与えたのである。

こうした「夢想」や「ヴィジョン」の力のおかげで、サン＝テグジュペリは、外面に対する内面の圧倒的な優位を確保することができた。それは、彼の宗教性にとって、なくてはならない大切な要因だったのである。

III　修道

「修道士」、「修道僧」、「修道院」といった「修道」に関わる言葉は、サン＝テグジュペリの人生や作品のあちこちに見られる。

たとえば、彼は、１９２７年から２９年にかけて、ダカール・カサブランカ路線の中継基地キャップ・ジュビーに滞在していたが、その頃母親に当てた手紙の中に修道僧、修道院といった言葉が頻出するのである。

> まったく修道僧のような生活を送っています！
> （中略）
> 完全な無一物です。一枚の板と薄い藁布団とでできているベッド、洗面器、水差し。小道具を忘れていました、――タイプライターと飛行場の書類です！まるで修道院の部屋です。（２０）

> 目下、カップ=ジュビー飛行場主任で、修道僧のような生活をしています。（２１）

> 何も欲しくはありません。修道僧の心構えがしっかりできています。（２２）

では、こうした「修道僧」の生活を通して、サン＝テグジュペリはいったい何を学んだのだろうか？

そこで、何よりも特徴的なのは、物質からの離脱――すなわち、物質への無執着――、さらに徹底的な沈黙だろう。そして、そのような沈黙の生活を通して、サン＝テグジュペリは、自分の内面と向かい合わずにはいなかったはずである。

こうして、サン＝テグジュペリの砂漠での簡素きわまる生活は、一方で、自己に向き合うための瞑想、そしてもう一方で、僚友を救助するという献身に当てられた。

> 牢獄のような修道院のなかで人は精神のひろがりを発見し、献身に献身をかさねておのれを完成していく……（２３）

いっさいの虚飾と気晴らしを排した空間で、徹底的に自分の内面と向き合えば、おのずと我々は「精神の広がり」を自覚し、また「真実の自己」を発見することになるだろう。外的環境にいっさい関わりのない「真実の自己」……。そして、その一方で、献身を通して自己を完成させていく。

後年、サン＝テグジュペリは、ソーレムの修道院に入りたがったり、またドミニコ会の修道院に入りたがったりする。そして、自分には信仰がないので、そうした修道院に入ることはできないと言う。しかし、キリスト教会に属する修道院に形式的に入らずとも、実質的な修道生活を行なうことによって、サン＝テグジュペリは、修道の目的――「真実の自己」の発見と、献身による「自己完成」――をすでに果していたのである。

IV　瞑想

ところで、瞑想もまた、サン＝テグジュペリの宗教性を培う上で、なくてはならない要素だった。

サン＝テグジュペリが生来の瞑想家であることに関しても、また、数多くの証言がある。

たとえば、サン＝テグジュペリは、

> 授業中、とつぜん瞑想状態に陥る癖があり、当てられても、とんちんかんな答えしかできなかった。（２４）

また、聖十字学院当時の自習監督は次のように言っている。

> 彼はむしろ、夢想好きで、瞑想家のように思われました。（２５）

聖十字学院での教育の二年次に文学を担当していたある神父も、サン＝テグジュペリについて同じような証言を残している。

> 彼はおとなしく、従順で、やや瞑想的で、とても控え目でした。（２６）

さらに、サン＝テグジュペリの一番の親友、サン＝テグジュペリが『星の王子さま』を献呈したレオン・ヴェルトは、「わたしが識っているままのサン＝テグジュペリ」という短い文章の中で、繰り返し、「瞑想」という言葉を使っている。

ちょっとのろのろした動き、落ちついた巨漢の動きで操縦席までたどりつき、瞑想のためにそこに座るといった風情だった。そのあと彼は、空間の幾何学と詩のなかに至福を見出した。（２７）

彼は思索からトランプの手品に、またその逆へと、このうえない優雅さにほかならぬ自在さをもって移行した。ときとして、彼の遊びの謹厳さと、彼の瞑想の空気のような軽快さとは、われわれに区別できなかった。（２８）

サン＝テグジュペリは、トランプの手品の魔術師だった。それは奇術ではなかった。とにかく、はるかそれ以上のものだった。奇術師は巻きつくような手で芸当をやる。それは器用さの軽業だ。その作業は気を入れておこなわれる。
それにたいして、サン＝テグジュペリは瞑想的な様子を保っていた。（２９）

また、批評家のアルベレスは、その、秀逸な小著『サン＝テグジュペリ』の中で、瞑想（または観想）という言葉を繰り返し用いて、サン＝テグジュペリの生の本質が瞑想にあることを示している。

（サン＝テグジュペリの飛行機乗りとしての世界は)、一見不動で、大地と星たちのあいだに孤立し、マホメットの墓のように浮遊する、空とぶ独居房に閉じ込められた瞑想者の世界なのだ。（３０）

（サン＝テグジュペリが）ひとつの職業の体験を語り、人間に何か言づてを残そうと思ったのは、日々、危険を冒しつつ、また瞑想にふけりつつ、これを分析することによって、或る象徴的世界を発見し、再創造したからだった。（３１）

一九三〇年から一九四〇年は、サン＝テグジュペリの円熟期である。（中略）行動に親しむばかりでなく、さらに観想者の好尚が加わった。皆と一緒に笑い、冗談を言うことも知っている。だが、彼の内部には瞑想の人が生まれたのだ。（３２）

サン＝テグジュペリは、偉大な行動人であったが、また観想の人でもあった。（３３）

薄い手帖に書きこまれたさまざまな覚え書き（一九五三年刊行の『手帖』）は、彼がじつに多種多様な問題について推論し、瞑想し、反省していたことを物語っている。（３４）

彼には、雲間で星たちと向かい合って果さねばならない職分がある、つまり、観想者という職分が。（３５）

飛行家というものは、たとえ自分の職務によってどんなに富ませられており、大空の巡礼としての瞑想によってどんなによく養われていても、自分の運命が地上的なものだということを知っている。（３６）

彼にとって飛行機は、たんなる《道具》にすぎない。それは行動の道具であり、仕事の道具であり、瞑想の道具でもある。彼は飛行機というものを、たいてい、この最後の意味に解している。（３７）

機は、目標のない夜のなかで、じっと動かずにいる。人間たちの住む世界から三〇〇〇メートルも離れて、遊星間に孤立しているひとつの世界。夜間飛行の星明りのなか、パイロットは、観想という、あの永遠への控えの間に入っていく。（３８）

彼の内なる思想家にせよ、夢想家にせよ、書物から生まれたものでもなければ、議論から生まれたのでもない。彼の瞑想は、触れてみることのできる具象的なものだ。彼は、世人と縁を切った修道者である。（３９）

戦列パイロットになり犠牲的任務をおびて離陸するときのサン＝テグジュペリは、人間の住む、この大地を二度とふたたび踏むことがないかもしれない、ということを知っている。彼は、任務遂行中の自分が、死刑を宣告された人間よりもっと人間たちから遠く隔てられているのを見いだすのだ。（中略）なんという思想、なんという貪欲な、なんと格別人間的な瞑想であろう！（中略）やがて奇跡的に生還し、乗機から降り立つときも、彼は戦闘任務から戻ってきた

という感じではない。そうではなくて、僧院の修道者独居房から、礼拝室から戻ってきたのだ。（４０）

しかしながら、われわれの内部に、ひとつの泉があって、どんな試練もこれを涸らすことはできない。（中略）それは止むことのない、無限の奇跡の泉であり、目には見えないけれども、われわれの内面に憩い、循環し、そして瞑想の時間にのみ地表へ流れ出す地下水だ。
（中略）
彼のまなざしは、生あるものや事物の上に向けられるとき、ちょうど、一週間前まで不毛の遊星たちの運行を観想していた神のまなざしであった。（４１）

飛行の夜、エンジンは規則正しく回転をつづけ、時間は消滅する、そこで瞑想がはじまる……。（４２）

彼の内部にひとりの観想者がいた。飛行の夜、乗機の操縦輪を握りながらふける瞑想、サハラ砂漠での難行苦行、そして孤独、これらすべてが観想の糧となりえたのだった。（４３）

サン＝テグジュペリの瞑想の舞台となったのは、まずは俗界から遠く離れたサハラ砂漠、そして、空中を飛ぶ飛行機の操縦席だった。両者ともに、この世的なしがらみから隔絶した、絶対的な孤独の空間である。
すでに「III　修道」で見たように、サン＝テグジュペリは、サハラ砂漠において、並みの修道僧がとうていなしえないような厳しい修道生活を送った。そして、日々を瞑想に費やしたのである。

砂漠に滞在しているあいだ、サン＝テグジュペリは、内省、観想、そして瞑想をしながら日々を過ごした。砂漠における孤独な生活をとおして、彼は、目に見えるものの背後に隠された目に見えないものの意味をつかみとったのである。（４４）

こうして、サン＝テグジュペリは、砂漠における瞑想を通して、思考を通してはとらえられないもの、言葉を通してはとらえらないもの、すなわち、「目に見えないものの本質」、「自己の本質」、「生命の永遠性」をとらえるに至ったのである。

ところで、砂漠が理想的な瞑想空間であるように、飛行機の操縦席もまた最適の瞑想空間だった。当時の飛行機は、計器がほとんどない初期の飛行機――危険すぎて瞑想など行なっていられない――とも違い、また、その後の、計器を何十も備えた、大いに発達した飛行機――忙しすぎてとうてい瞑想などできない――とも違い、ちょうど人間が完璧に統御できるがゆえに、人間が完全に一体化することのできる理想的な機械だった。つまり、当時の飛行機は、瞑想の道具として申し分のない発達段階にあったのである。飛行機の操縦席は、いわば「空飛ぶ瞑想室」だったと言えよう。

砂漠という強いられた環境で瞑想に熟達したサン＝テグジュペリは、飛行機の操縦席においても、繰り返し、繰り返し、瞑想を行なっている。

たとえば、『夜間飛行』の主人公ファビアンは、次のように瞑想のなかに沈んでいくが、これはもちろんサン＝テグジュペリの経験に基づいて書かれた一節である。

> それから、なにひとつ揺れず、震えず、動かず、ジャイロも、高度計も、エンジンの回転数も安定を見せていたので、彼はちょっと伸びをし、うなじを革の座席にもたせかけ、説明不可能な希望を味わわせてくれる、かの飛行中の深い瞑想のなかに沈んでいった。（４５）

ここで、深い瞑想が、説明不可能な――つまり、言語では表現できない――希望を味わわせてくれる、と言っている点に注目しよう。真の瞑想体験――すなわち、神秘体験――は、言語化できないのである。

また、「飛行士と自然の力」のなかで次のように描写されている場面は、まさに理想的な瞑想の境地であろう。瞑想のうちに我を忘れ、意識が「空」の状態になっているからである。

> もはや危険も、サイクロンも、見失われた陸地も存在しなかった。
> （中略）
> なにもわからない。自分が空（から）っぽになってゆくことを除いて、なにも感じない。体力も、戦おうという意識も空っぽになっていく。（４６）

さらに、モーリス・ブールデの『飛行家の偉大と服従』への序文の中で、大空という純粋きわまる空間に身をおくことによって、心もまた純化されていく様子を次のように美しい透明な散文で語っている。

夜はしだいに目にみえる世界を洗いきよめ、真黒な砂をみおろす星以外、なにも存在しなくなってくる。と同時に、心のなかもきっぱりと洗いきよめられてくるのだ。大切なことと思いこんでいたが、いまではさして重要でなくなってきたすべて、怒りも、濁った欲望も、嫉妬も、みんな拭いさられ、厳粛な事実だけがあざやかになってくる。一時間一時間と、夜明けにむかう星たちの階段をおりながら、こうして自分が純粋になっていくのを感じるのである。（４７）

一方、母親への手紙の中で、操縦席での瞑想中に感じる静寂に関して、次のように語っている。

ママン、私はこの仕事をすばらしいと思います。自分のエンジンとさし向いで高度四千メートルにあるときのあの静かさ、あの孤独は、あなたにはご想像になれません。（４８）

さらに『人間の大地』の中に描かれている次の場面は、外界がいっさい消え去り、すべてのものの埒外にあって、神にすべてを委ねている理想的な瞑想の状態を示していると言えるだろう。

だが、大部分の時間は、星々とおなじ鉱物質の光、弱まることのない、ひめやかなおなじ光、おなじ言語をかたる光を投げかける自分の小さな星座にかこまれて（つまり、計器の光にかこまれて―浅岡注）、暗闇にすっぽりつつまれている。（中略）わたしもまた自分を勤勉かつ虚心であると感じている。外界のいっさいは消え去ってしまった。
（中略）
しかしわたしは、瞑想のなかへと入ってゆく。（中略）わたしたちはすべてのものの埒外にある。（中略）わたしたちは神の裁量にゆだねられている。（４９）

また、『戦う操縦士』の中での、極度の危険にのぞんだサゴンの経験は、そのひとつひとつがサン＝テグジュペリ自身のものでもあった。飛行中に生命の危機に

瀕し、感覚が停止し、思考も停止し、時間の埒外に出て、自分の全時間、無限の閑暇すなわち永遠を実体験しているのである。

彼は残っているのは自分ひとりだと信じていたし、機は火を吹いていたし、敵戦闘機は、乱射を繰り返しながらなんども襲ってきていた。（中略）彼はなにも感じなくなっていた。自分の全時間を手に入れていたのだ。一種無限の閑暇のなかに浸っていたのだ。（中略）サゴンは、まるで時間のそとに投げ出されたように、そこ、主翼のうえにたたずんでいたのだ！（５０）

こうして、サン＝テグジュペリは、飛行機に乗って危機的な情況に身を置くことで瞑想状態に入り、その結果、修道院で１０年間瞑想するよりもさらに多くのことを学んだのである。

わたしたちはフランスが燃えているのを見た。海が光芒を放つのを見た。高空で年老いた。博物館の陳列箱をのぞくように、はるかな大地をのぞき見た。太陽のなかで敵戦闘機とたわむれた。それから高度をさげた。わたしたちは火災のなかに身を投じた。いっさいを犠牲にした。そうやって、わたしたち自身にかんして、十年の瞑想を通じて学ぶよりも多くのことを学んだ。そして、やっとその十年の修道院生活から抜け出してきたのだ……。（５１）

このようにして瞑想を通じて体験したことは、理性や知性を超えており、言葉によって表現することはできなかったが、しかし、一方で疑いようのない明証性を備えていた。そうした体験によって、サン＝テグジュペリは深い叡智を得たのである。

以上見てきたように、サン＝テグジュペリは、瞑想するために、「至高の命令に従い、他の者なら修道院をえらんだであろうように、砂漠なり定期航空路をえらんだ人たち」（５２）のうちの代表的な１人だったのである。

V　愛情

サン＝テグジュペリは一生のあいだ母親を愛し続けたし、母親もまた、この最後までやんちゃであり続けた息子を深く愛していた。

サン＝テグジュペリは、幼少年期には無意識のうちに母親を愛しているが、成人する前後から自覚的に母親を愛し始めた。

それまでの子どもらしい愛し方から脱して、自分の利己性と愛情表現の不器用さに気づき、反省を行なった上で、理解を基盤に母親をより深く愛し始めた２１歳のころの書簡を見てみよう。

あなたは私たちのためになにもかもしてくださったのに、私はしばしばそれに気がつかずにいました。私はじつに利己的で、そのうえ不器用でした。あなたが支えを必要としていられたのに、私はまったくその支えにはなりませんでした。毎日、すこしずつ、私はあなたのことを理解し、いっそう深く愛しはじめているように思います。（５３）

また、２７歳の頃には、すべてのやさしさの源泉である母親への愛情を表現して、次のような手紙を書き送っている。

愛するママン
毎週のこの短い手紙は、あなたに安心していただくためです。私は元気ですし、幸福です。それに、また、私の愛情をすっかりお伝えするためです、ママン。あなたはこの世でもっともやさしく、善い方です。（５４）

さらに、２９歳のころにはますます募る愛情を表現して、次のような優しい手紙を書いている。

心をこめて接吻します。これはお別れの手紙ではありません。ビルバオまでのあいだに短い手紙を書いて、私の愛情全部を、愛するママン、あなたがよくご存じの私のこんなにも深い愛情をお伝えしたいのです。（５５）

一方で、母親からの愛を証言している手紙もある。

あなたに接吻します。ママン。あらゆる人びとのやさしさのなかで、あなたの愛情がもっとも貴重なものであり、人生の困難な時期には、いつでもあなたの腕のなかに私が戻ってゆくのだということをお考えください。そして、また、しばしば幼子のように私があなたを必要としていることも。（５６）

さらに、母親からの愛と、自分からの愛を、同時に表明している美しい手紙もある。

次に掲げる２通の手紙は、２５歳から２６歳ころにかけて書かれたものである。

ママン、うまくは言えませんが、私があなたをどんなに讃嘆し、愛しているかを申しあげなければなりません。あなたが示してくださる愛は、ほんとうに心を安らぎのなかに置いてくれます。（５７）

あなたのやさしい愛以上のものはないのだとお考えになってください。でも、こんなことは言いようがありませんし、これまでもうまく言えませんでした。それでも、それはこんなにも心のなかに感じられていて、こんなにも確かであり、いつも続いているのです。誰をもこんなには愛したことがないほど、私はあなたを愛しています。（５８）

それでは、母親の方は、息子サン＝テグジュペリをどのようにとらえていたのだろうか？　彼女、マリ・ド・サン＝テグジュペリは、息子について、「母への手紙」の序文で次のように書いている。

生活の困難が彼を自覚のある人間にし、航空路が英雄にし、また作家にしました。

流謫が、たぶん、彼を聖者にしました。

けれども、英雄以上に、作家以上に、魔法使い以上に、聖者以上に、アントワーヌを私たちにこんなにも近づけてくれるものは、彼の無限のやさしさです。（５９）

ここで、母親のマリが、「無限のやさしさ」と呼んでいるものこそ、サン＝テグジュペリの無限に深い愛情であった。

このように、母親とのあいだで愛し、愛される関係を維持し続けたサン＝テグジュペリだったが、こうした愛情関係によって、彼は、ほかでは得られない「安らぎ」、「優しさ」、「温かさ」、「保護」、「安全」などを感じていたのである。しかも、サン＝テグジュペリは幼年時代の思い出に浸ることによっても、しばしば同じ感

覚を得ていた。ところで、これらは本来、我々が神との関係で得るはずの感覚である。

ということは、サン＝テグジュペリは、本来神との関係で見出すべき感覚を、母親、または幼年時代との関係で見出していたことになる。すなわち、サン＝テグジュペリにとって、母親、または幼年時代は擬似的な神であったということになるだろう。

次に、妻コンスエロとの関係はどうだったのだろうか？

これは周知のように、決して幸福な関係ではなく、サン＝テグジュペリは、気まぐれで見栄っ張りのコンスエロに絶えず振り回されて、ついに円満な家庭を築くことができなかった。

人間関係におけるサン＝テグジュペリの愛情は、逆説的だが、「距離」によって保証されていた。つまり、対象との距離があるときにこそ、サン＝テグジュペリの愛情は純粋なものとなり、本格的なものとなるのである。

その意味では、コンスエロとの関係が近すぎたゆえに、愛が純化の過程を経ることがなかったと言えるかもしれない。

それでは、他の対象に対する愛はどうだったのだろうか？

まず、サン＝テグジュペリは「生きること」すなわち「人生」を愛した。

> わたしが愛しているのは危険ではない。自分が愛しているものはちゃんと知っている。それは生きることだ。（６０）

また、「飛行機に乗ること」をこよなく愛した。つまり、「飛行への表現を絶した愛を経験」していたのである。

> 夜が迫ってくるのが感じられる。神殿のなかに閉じこもるように、ひとがそのなかに閉じこもる夜。（中略）俗界のすべてはすでにうすれ、姿を消そうとしている。下界はまだ金色の光を受けてはいるが、はやくもなにかが気化しはじめている。（中略）この時刻ほどに価値あるものはなにも知らない。飛行への表現を絶した愛を経験した者たちだけが、私の言う意味を理解してくれるはずだ。（６１）

さらに、「戦友たち」、「僚友たち」を愛し、自らが属する「隊」を愛している。

つまり、参加する権利を。結ばれる権利を。一体となる権利を。受け取り、かつ与える権利を。自己以上のものとなる権利を。わたしを力づよく拡大させてくれるかの充溢に近づく権利を。戦友たちにたいして感じているかの愛を感じる権利を。（中略）隊にたいするわたしの愛は、口に出して言われる必要のないものだ。それは絆のみでできている。それはわたしの実質そのものだ。（６２）

ここで、サン＝テグジュペリが、「愛」を次のように定義していることに注目したい。

「参加すること」
「結ばれること」
「一体となること」
「受け取り、かつ与えること」
「自己以上のものとなること」
「わたしを力づよく感じさせてくれるかの充溢に近づくこと」
「口に出して言われる必要のないもの」
「絆のみでできているもの」
「わたしの実質そのもの」

これは、ほとんど完璧な愛の定義だと言えるのではないだろうか。

また、サン＝テグジュペリは、『人間の大地』のなかで、ある「庭師」について次のように語っている。

彼は愛によって、地球（テール）のあらゆる土地と、あらゆる樹木に結ばれていた。彼こそ、心の広い、もの惜しみをしない、真の王侯だった。（６３）

もちろん、この庭師はサン＝テグジュペリのことでもある。したがって、サン＝テグジュペリは「地球のあらゆる土地と、あらゆる樹木」を愛していたことになるだろう。

また、『人間の大地』のなかで、サン＝テグジュペリは、彼を救ってくれたリビヤのベドウィン人について次のように語っている。

> きみは「人間」だ。そしてきみは、同時にあらゆる人間の顔をしてわたしに現われる。（中略）きみは最愛の兄弟だ。そして、このわたしのほうも、あらゆる人間のなかにきみを認めるだろう。（６４）

ここで、サン＝テグジュペリはあらゆる人間の中に「最愛の兄弟」を認めている。ということは、あらゆる人間を愛している――隣人愛の極み――ということである。

また、このベドウィン人は、人間であると同時に「大いなる主」すなわち「神」でもある。

> きみは、高貴さと歓待とに溢れ、飲むものを与える力を持った大いなる主としてわたしに現われる。わたしのすべての友、わたしのすべての敵がきみを通じて私のほうに歩み寄ってくる。（６５）

サン＝テグジュペリは、あらゆる人間を愛し、「高貴さと歓待とにあふれ」る神を愛し、すべての敵を愛している。ゆえに、サン＝テグジュペリにはもう、「この世界にただひとりの敵もいない」。（６６）

これは、まことに驚嘆すべき隣人愛である。その広さにおいて、その高さにおいて、その深さにおいて、まさしくイエス・キリストを思わせるような愛ではないだろうか。

VI　無私

サン＝テグジュペリは、若いころから絶えず向上することを目指しており、また、自分を越えるもの、自分の外部にあるものに奉仕することを生きる上での信条としてきた。自分に関わりすぎることを自戒していたのである。

アンドレ・ジッドは、『夜間飛行』の序文で、「緊張した意志が獲得させてくれる

かの自己超越というものこそ、とりわけ、われわれが教えてもらいたいと思っているものなのである」（６７）と言っているが、サン＝テグジュペリの文学の著しい特徴はこの「自己超越」、「自己放棄」、「自己滅却」、そしてそれに伴う「高貴さ」であったと言うことができるだろう。

ただし、「自己超越」または「自己滅却」が可能となるためには、「謙譲さ」が必要である。そうした事情をサン＝テグジュペリは『戦う操縦士』において次のように述べている。

> 謙譲さは、他者を通じて神に敬意を払うように強制すると同時に、おのれ自身において神に敬意を払い、おのれを神の使者、ないしは神にいたる道たらしめるように強制していた。おのれを偉大ならしめるために、おのれを忘れるように義務づけていた。個人がおのれ自身の重要さに熱中するなら、道はたちまち壁に変じてしまうからである。（６８）

ここで「おのれを忘れる」といっていることこそが、「自己滅却」すなわち「無私」なのである。また、「謙譲さ」が神との関係において語られていることにも注意する必要があろう。

また、サン＝テグジュペリは「無私」に関して次のようにも言っている。

> ものごとを理解するための第一の資格は、一種の無私無欲、自己滅却だ。（６９）

この言葉は、次の一節とともに読むとき、いっそう深い趣をたたえることになるだろう。

> 人はおのれを越えるや否や、到達するのは普遍であり――人間の偉大さである。合理的なものの上に築かれた高貴な態度なるものを、ぼくは知らない。（７０）

すなわち、人間が、ものごとを真に「理解」して、「高貴さ」、「偉大さ」、「普遍」に到達するためには、「無私」こそが不可欠の要因であることをサン＝テグジュペリは知悉していたのである。

VII　真実

サン＝テグジュペリは一生のあいだ「真実」または「真理」を求めつづけた。では、サン＝テグジュペリにとって、「真実」とはいかなるものであったのだろうか？

真実とは世界を単一化するものであって、混沌を生み出すものではない。真理、それは普遍的なものを明るみに出す言語である。（中略）真実、それは論証されるものではなく、単一化するものにほかならない。（７１）

すなわち、「真実」とは、世界を複雑にし、混沌を生み出すものではなく、世界を単純に説明し、秩序を生み出すものである。また、「真理」は「普遍」を明るみに出すものでもあり、さらに、人間に生の充実感を与え、人間をして人間たらしめるものである。

ここで、サン＝テグジュペリが、常に、「理性」（＝論理）と「精神」（＝霊性）を対立させていたことを思い出そう。

理性はあらゆるイデオロギーを論証することができる。しかし、あらゆる論証には反証が可能なのである。ゆえに、論理は何ものも確実なものとしない。

理性は分析するが、「真理」に到達することはできない。精神は綜合し、「真理」を明らかにする。

理性は高貴さと無縁である。それに対して、精神は高貴さをその本質とする。

理性は説明することはできるが、生命を創造することができない。精神は説明はしないが、生命を創造する。『人間の大地』の最後に掲げられた謎めいた次の言葉も、この意味に解すべきだろう。

精神の風が粘土のうえを吹きわたるとき、はじめて人間は創造されるのだ。（７２）

レオン・ヴェルトはこうしたサン＝テグジュペリの態度を、きわめて優雅に、また詩的に表現している。

サン＝テグジュペリは、アンデス山脈の上空や、また、さまざまな理論体系の上空を飛ぶことを習慣としていた。（７３）

では、どうすれば「真実」を把握することができるのだろうか？　そのヒントは、サン＝テグジュペリが著書のあちらこちらで言及している「明証性」にある。

Ｉにおいてサン＝テグジュペリがリヨンのフルヴィエール聖堂で経験したことを紹介したが、そこでこの「明証性」という言葉が使われていた。「その時、ぼくは自分が絶対船の中にいると感じていた。単旋律の聖歌、広がる海原、風をはらむ帆。ぼくは驚くべき確信を得ていた。それは、船のように、まっすぐ、どこかへ向かっていた。内陣には、旅人であるぼくと乗組員。そう、ぼくは密航者だった！ぼくは、自分がこっそりそこに忍び込んだという印象をいだいていた。ぼくは、まさしく眩暈を感じていた。ある疑い得ない明証性がもたらす眩暈を。」

これは「なにものか」がありありと「現前」し、その「現前」を実体験することによって「驚くべき確信」を得る経験である。この、眩暈をもたらすほどの「明証性」によって、サン＝テグジュペリは「真実」を悟ったのである。

たとえば、『戦う操縦士』では、この「明証性」に関して、次のように表現されている。

> わたしは家路についている。三三-二飛行大隊はわが家だ。わたしにはわが家の人間の心がわかる。ラコルデールについて思いちがいをわけがない。ラコルデールもわたしについて思いちがいをするわけがない。わたしはこの共同体を、異常なまでの自明性の感情をもって感じ取っている。（７４）

「理性」でも「知性」でも「言語」でも説明することはできないが、それでも「異常なまでの自明性をもって感じ取っ」たことがあったのである。

『人間の大地』においては、この「自明性」と「真実」が次のように説明されている。

> きみが言葉に翻訳することができなかった真実、だがその自明性がきみを支配してしまった真実……（７５）

また、『手帖』には次のように書かれている。

> いくつかの泉。まったく霊的な領域にも、知的領域におけると同じような明証性がある。（７６）

理性や知性によってはとらえられないが、泉のように確かな明証性が存在する。サン＝テグジュペリはこの、眩暈をもたらすような強烈な明証性をたびたび経験し、そして「真実」を悟り、叡智を身につけていったのである。

VIII　静寂

ただし、明証性を経験するには、どうしても欠かすことのできない要素がある。それが「沈黙」、「静けさ」、「静寂」である。

たとえば、サン＝テグジュペリは２６歳のころ、リネットに宛てた手紙の中で、飛行中に感じる静けさについて次のように書いている。

> 故障もなく、霧もかからず、足下の山々のうえに、「そのしたはあの世だ」という例の低い雲が垂れこめていないとき、あなたには次第に高度をさげてゆく際の静けさが想像できないだろう。（７７）

この手紙より一月ほど前に、同じくリネットに当てた手紙では、あわや事故かという危機の中で感じられた「完全無欠な静寂」について語られている。

> あの野原やあの静かな太陽をどう物語ったらいいのだろう？　「ぼくはあの野原、あの太陽を理解した……」と、どう言ったらいいのだろう？　だが、それは真実だったのだ。ぼくは、数秒のあいだ、その一日の光り輝く静寂をその完全無欠さのなかで感じ取ったのだ。（７８）

ここで、サン＝テグジュペリは、「ぼくはあの野原、あの太陽を理解した……」と言っているが、この「理解」が「明証性をもって確信する」ということにあたるだろう。だから、それは、言語を絶しており、言葉で説明することはできない。

さらに、『夜間飛行』の中には次のような描写が見られる。

> ただ、高度六千メートルでやっと越えられる切り立った尾根、まっすぐに垂れさがる岩石のマント、怖ろしいばかりの静寂があるだけだった。（７９）

この「怖ろしいばかりの静寂」、「絶対的な静寂」の中で、サン＝テグジュペリは「明証性」を体験し、「真実」に出会い、「普遍」に出会い、そして「自分自身」

に出会ったのである。

飛行中の「静けさ」と並ぶもうひとつの「静寂」、つまり、砂漠における「孤独」と「沈黙」についてはすでに述べた。砂漠においても、その「絶対的な沈黙」のうちに、サン＝テグジュペリは数々の「真実」に出会ったはずである。

IX　精神

サン＝テグジュペリが女性の顔に魅せられるとしたら、それは女性の物質的な外被である顔の造形に惹かれるのではなく、そこに現われる内面性、精神性、「うつろいやすい水面（みずも）のうえを吹く風のようなもの」、すなわち「詩」に惹かれるのである。（８０）

サン＝テグジュペリは、「物質」ではなく「精神」を、「形体」ではなく「意識」を、「肉体」ではなく「霊魂」を、「外面」ではなく「内面」を、常に大切にして生きた。

なぜなら、

> 自分の内面生活こそ人生のもっとも重要な側面である（８１）

からである。彼は、２５歳のときの母親宛の手紙の中で次のように書いている。

> 私にとって内面生活だけがどれほど大切であるかは、ご想像を遙かに超えています。（８２）

生きる上で、サン＝テグジュペリは、

> 人間の帝国は内面にある。（８３）

と考えていた。

この内面性の徹底的な優位こそが、サン＝テグジュペリの人生の大きな特徴だった。

彼が内面性、精神性をどれほど大事にしたかは、次の一節を読めばはっきりとわかるだろう。

きみのなかにあって、ぼくが愛したものには、いかなる物質的な意味も含まれてはいない。（中略）精神的な意味というのでなければ、意味をもつものはなにもない。（８４）

また、砂漠における内面生活について論じ、精神こそが人間を支配しているのであって、しかもその精神とは神々の別名であるとする次の文章もきわめて印象的である。

また、砂漠はいかなる触知可能な富もさし出さず、砂漠のなかには見たり聞いたりできるものはなにひとつない。だから、内面生活は眠りこむどころか強化され、まずもって人間は、目に見えぬ誘いによって生気づけられているのだということを認めざるをえなくなるのだ。人間は精神によって支配されている。砂漠のなかでは、わたしの価値は、わたしの神々の価値によって定まるのだ。（８５）

サン＝テグジュペリが愛した「星の上に咲く薔薇」、「砂漠のどこかにある井戸」、「家に隠された宝」、「目に見えない宝物」といった比喩はすべて、人間の内面性、精神性の美しい詩的表現である。中でもとりわけ美しいのが、人間の「意識」を「星」、「灯」、「光」にたとえた『人間の大地』の冒頭にある一節であろう。

わたしの目には、アルゼンチンでも最初の夜間飛行の折、星々のように、草原のなかに散在する数すくない灯火がまたたいているだけの暗い夜の模様が永遠に灼きついている。

そのひとつひとつは、闇の大洋のなかで、人間の意識の奇跡を告げ知らせていた。（中略）ぽつんぽつんと、田園のなかに、それぞれの糧を求める灯が輝いていた。詩人、教員、大工の灯のような、もっともつつましやかな灯までがあった。だが、それら生きている星々のなかには、なんと多くの閉ざされた窓が、なんと多くの光を消した星があったことか。（８６）

サン＝テグジュペリの願いは、そういう消えてしまった星――すなわち、人間の意識――にふたたび光を灯し、その上で、それらの光と通じ合い、結び合うこと

だった。

X　服従と犠牲

我々が自分を犠牲にするのは、自分を越えた価値――大いなるもの――に服従するからである。我々は何ものかに服従することなしに、自己を犠牲にすることはできない。その意味で、服従と犠牲は切り離すことのできない対の概念である。

一方、自分を超えた価値を信じず、自分のことしか考えない人間は、けっして自分を犠牲にすることがない。サン＝テグジュペリは、そうした生き方を価値のないもの、貧しいものと考えていた。

サン＝テグジュペリの一生は、服従と犠牲をめぐるものであったと言ってもよいだろう。事実、彼の四つの小説、『南方郵便機』、『夜間飛行』、『人間の大地』、『戦う操縦士』も、すべて、服従と犠牲をテーマとしているのである。

サン＝テグジュペリは、人間のうちに神性が宿っていると考えており、神性の宿った人間を大文字の〈人間〉と呼んだ。〈人間〉はその普遍的な神性ゆえに、全人類的に強固な絆で結ばれており、その絆ゆえに、一人の〈人間〉は、他の〈人間〉のために自己を犠牲にすることができる。そして、そのような「本質的な」行為である「犠牲」こそが〈人間〉を〈人間〉たらしめるのである。

レオン・ヴェルトは「わたしが識っているままのサン＝テグジュペリ」という小文の中で、次のように述べている。

> 彼は礼儀正しさ（クルトワジー）を美徳と考えていた。彼はこの言葉が好きで、それに伝統的な意味（宮廷（クール）を語源とし、中世の騎士道精神にのっとった献身、服従、礼儀をさす）や、それ以上に《人間への敬意》という意味を与えていたばかりではなく、自己制御という東洋的意味をも与えていた。（８７）

ここで使われている「献身」は「自己犠牲」と言い換えてもいいだろう。

また、アンドレ・ジッドは『夜間飛行』の序文の中で、次のように主張している。

> また、人間は自己自身のなかにおのれの目的をけっして見出すことがなく、なにかしら、おのれを支配し、おのれによって生きるものに自己を従属させ、

自己を犠牲にするものだからである。（８８）

もちろん、ここでも、「従属」という言葉は、「服従」という言葉に置き換えることができる。

さらに、アルベレスは、犠牲的任務を帯びて大空に飛び立っていくサン＝テグジュペリの覚悟について次のように述べている。

戦列パイロットになり犠牲的任務をおびて離陸するときのサン＝テグジュペリは、人間の住む、この大地を二度とふたたび踏むことがないかもしれない、ということを知っている。彼は、任務遂行中の自分が、死刑を宣告された人間よりもっと人間たちから遠く隔てられているのを見いだすのだ。（中略）なんという思想、なんという貪欲な、なんと格別人間的な瞑想であろう！（８９）

ここで、サン＝テグジュペリは、自己犠牲による死を覚悟しているからこそ「格別人間的な瞑想」を体験することができた。すなわち、「犠牲」が彼を「人間的」にしたのである。

サン＝テグジュペリ自身、『戦う操縦士』の中で、犠牲に関して次のように述べている。

わたしたちはフランスが燃えているのを見た。海が光芒を放つのを見た。高空で年老いた。博物館の陳列箱をのぞくように、はるかな大地をのぞき見た。太陽のなかで敵戦闘機とたわむれた。それから高度をさげた。わたしたちは火災のなかに身を投じた。いっさいを犠牲にした。（９０）

１９４４年７月３１日８時４５分、サン＝テグジュペリは偵察の任務のために、抜けるような青空に向かって飛び立っていった。そして、いっさいを犠牲にした結果、ついに帰らぬ人となった。

XI　至福

ここで、サン＝テグジュペリの美しいページたちの中から、とりわけ美しい、至福に満ちたページを引用しておこう。

あれは、戦前のある一日、トゥルニュス近くのソーヌ河の岸辺でのことだった。私たちふたり（私とウェルト）は、昼食のために、木製のバルコニーが河にむかってせり出しているレストランをえらんだ。（中略）わたしたちから数歩のところで、ふたりの水夫がはしけから荷をおろしていたので、わたしたちはその水夫たちを招待することにした。（中略）

太陽は心地よかった。ほの暖かい蜜のような光が、対岸のポプラの樹を浸し、さらに野面を地平線まで浸していた。わたしたちは、いぜんとして理由もわからぬまま、ますます陽気になっていった。太陽は明るく照ることで、河は流れることで、食事は食事であることで、水夫たちは呼びかけに答えたことで、給仕女は、まるで永遠につづく祝祭を取りしきっているかのように、幸福そうな気くばりをこめて給仕することで、それぞれが心をなごませてくれていた。わたしたちは、無秩序から守られ、決定的な文明のなかにみごとに組みこまれて、完全に平和のさなかにあった。そして、すべての望みがかなえられ、もはや頼りにしなければならぬものはなにもないといった、一種完璧な状態を味わっていた。わたしたちは、自分が純粋で、正しく、光り輝き、おおらかであることを感じ取っていた。いかなる真実がその自明性のうちに出現したかは、言おうにも言いようがなかった。しかし、わたしたちを支配している感情は、まさに確信の感情だった。ほとんど誇らしいとさえいえる確信の感情だった。

そうやって宇宙は、わたしたちを通じて、その善良な意志を証拠立てていた。星雲の凝縮、遊星の固体化、最初のアメーバの形成、アメーバから人間へと歩んだ生の巨大な営為、すべては幸運にも収斂し、わたしたちを通じて、このような質の歓びへと到達したのだ！　成果として悪かろうはずはなかった。

こんなふうにわたしたちは、この暗黙の和合、ほとんど宗教的ともいえる祭式をとくと味わっていた。司祭のような給仕女の言ったり来たりに陶然となって、水夫とわたしたちは、どの教会かは言うことができないながら、ひとつのおなじ教会の信者として祝杯をあげていた。ふたりの水夫のいっぽうはオランダ人で、もういっぽうはドイツ人だった。ドイツ人のほうは、かつてナチズムをのがれてきたのだった。かの地で、コミュニストか、トロツキストか、カトリックか、ユダヤ人か、いずれかとして追跡されたのである。（その男がどんなレッテルを貼られて国外追放に会ったのかはもう思い出せない。）だが、あの瞬間においては、水夫はレッテルなどとはまさに別の存在だった。重要なのは内実だった。人間としての練り粉だった。彼はごく単順に、ひとりの友人だった。そしてわたしたちは、友人どうしとして一致していた。きみも一致していた。

わたしも一致していた。水夫たちも給仕女も一致していた。なんにかんして一致していたのだろう？　（中略）わたしたちもまた、それを言おうにも言いようがなかった。だが、その一致はきわめて完全で、深いところにしっかりと根づいていて、言葉では表現できなかったにもかかわらず、その実質においてきわめて明白なひとつの聖書にもとづいていた（中略）

実質とはなにか？……言い表すことが困難なのはまさにこの点だ！　本質ではなく、いくつかの反映しかとらえられることができぬという危険があるのだ。不十分な言葉だと、わたしの真実を取りにがすことにもなりかねない。水夫たちのほほえみの、きみのほほえみの、わたしのほほえみの、給仕女のほほえみのある質……（９１）

なんという幸福、そして、なんという光に満ちたページだろう。サン＝テグジュペリは、今という瞬間を完璧に生きている。その結果として、次のような、あらゆる幸福の要素を経験しているのである。

心地よさ
暖かさ
光
陽気
永遠
祝祭
幸福
和み
秩序
平和
すべての望みがかなえられた状態
完璧
純粋
正しさ
輝き
おおらか
真実
自明性

確信
歓び
和合
陶然
一致
実質
本質
真実
ほほえみ

まさしく、これらこそ、真の意味での宗教体験と言えるだろう。サン＝テグジュペリは、制度としてのカトリック教会には属していなかったが、一人の人間として、望みうる最高レヴェルの宗教性を備えていたのである。

そして、サン＝テグジュペリが、ここで言及している、「ひとつのおなじ教会」、「ひとつの聖書」とは、言うまでもなく、人類共通の普遍的な教会、普遍的な聖書のことであろう。サン＝テグジュペリは、そのような教会、そのような聖書を、心ひそかに夢みていたのである。

注

（１）André-A. Devaux, *Saint-Exupéry*, Desclée de Brouwer, 1965, p.16
（２）『サン＝テグジュペリ著作集４　母への手紙・若き日の手紙』、清水茂・山崎庸一郎訳、みすず書房、1987 年、p.39
（３）*Ibid.*, p.39
（４）*Ibid.*, p.45
（５）Alain Houziaux, Guy Coq, André-A Devaux, Robert Chenavier et autres, *Les écrivains face à Dieu*, Editions In Press, 2003, p.86
（６）以下の三つのエピソードは、André-A. Devaux の上掲書、p.40~41 による。
（７）山崎庸一郎、『サン＝テグジュペリの生涯』、新潮社、1971 年、p.170
（８）Alain Houziaux, Guy Coq, André-A Devaux, Robert Chenavier et autres, *op.cit.*, p.92

（９）『サン＝テグジュペリ著作集　５　手帖』、杉山毅訳、みすず書房、1984 年、p.34
（１０）W.ジェイムズ、『宗教的経験の諸相（上）』、桝田啓三郎訳、岩波書店、1969 年、p.49~52
（１１）山崎庸一郎、*op.cit.*, p.22
（１２）*Ibid.*, p.56
（１３）『サン＝テグジュペリ著作集　１　南方郵便機・人間の大地』、山崎庸一郎訳、みすず書房、1983 年、p.199
（１４）*Ibid.*, p.197
（１５）*Ibid.*, p.202
（１６）*Ibid.*, p.270
（１７）*Ibid.*, p.271~273
（１８）『サン＝テグジュペリ著作集　２　夜間飛行・戦う操縦士』、山崎庸一郎訳、みすず書房、1984 年、p.244
（１９）*Ibid.*, p.247~248
（２０）『サン＝テグジュペリ著作集　４　母への手紙・若き日の手紙』、清水茂・山崎庸一郎訳、1987 年、p.209
（２１）*Ibid.*, p.208
（２２）*Ibid.*, p.214
（２３）『サン＝テグジュペリ著作集　３　人生に意味を』、渡辺一民訳、みすず書房、1987 年、p.245
（２４）稲垣直樹、『サン＝テグジュペリ』、清水書院、1992 年、p.29
（２５）山崎庸一郎、*op.cit.*, p.21
（２６）*Ibid.*
（２７）『サン＝テグジュペリ・コレクション３　人間の大地』、みすず書房、2001 年、p.217
（２８）*Ibid.*, p.224
（２９）*Ibid.*, p.225
（３０）R・M・アルベレス、『サン＝テグジュペリ』、中村三郎訳、水声社、1998 年、p.16
（３１）*Ibid.*, p.21
（３２）*Ibid.*, p.63
（３３）*Ibid.*, p.66
（３４）*Ibid.*, p.67

（３５）*Ibid.*, p.73
（３６）*Ibid.*, p.78
（３７）*Ibid.*, p.80
（３８）*Ibid.*, p.83
（３９）*Ibid.*, p.84
（４０）*Ibid.*, p.87~88
（４１）*Ibid.*, p.160
（４２）*Ibid.*, p.162
（４３）*Ibid.*, p.160
（４４）Charles Mœller, *Littérature du XXe siècle et christianisme V Amours humaines*, Casterman, 1975, p.104
（４５）『サン＝テグジュペリ著作集　２　夜間飛行・戦う操縦士』、p.13
（４６）『サン＝テグジュペリ・コレクション３　人間の大地』、みすず書房、2001 年、p.208
（４７）『サン＝テグジュペリ著作集　３　人生に意味を』、渡辺一民訳、みすず書房、1987 年、p.233
（４８）『サン＝テグジュペリ著作集　４　母への手紙・若き日の手紙』、p.160
（４９）『サン＝テグジュペリ著作集　１　南方郵便機・人間の大地』、p.257~258
（５０）『サン＝テグジュペリ著作集　２　夜間飛行・戦う操縦士』、p.168
（５１）*Ibid.*, p.288
（５２）『サン＝テグジュペリ著作集　１　南方郵便機・人間の大地』、p.308
（５３）『サン＝テグジュペリ著作集　４　母への手紙・若き日の手紙』、p.133
（５４）*Ibid.*, p.199
（５５）*Ibid.*, p.230
（５６）*Ibid.*, p.244
（５７）*Ibid.*, p.185
（５８）*Ibid.*, p.186~187
（５９）『サン＝テグジュペリ著作集　１　南方郵便機・人間の大地』、p.297
（６０）*Ibid.*, p.297
（６１）*Ibid.*, p.254
（６２）『サン＝テグジュペリ著作集　２　夜間飛行・戦う操縦士』、p.275
（６３）『サン＝テグジュペリ著作集　１　南方郵便機・人間の大地』、p.183
（６４）*Ibid.*, p.305

（６６）*Ibid.*
（６７）『サン＝テグジュペリ著作集　２　夜間飛行・戦う操縦士』、p.4
（６８）*Ibid.*, p.308
（６９）『サン＝テグジュペリ著作集　４　母への手紙・若き日の手紙』、p.305
（７０）『サン＝テグジュペリ著作集　５　手帖』、p.99
（７１）『サン＝テグジュペリ著作集　１　南方郵便機・人間の大地』、p.322
（７２）*Ibid.*, p.333
（７３）『サン＝テグジュペリ・コレクション３　人間の大地』、p.219
（７４）『サン＝テグジュペリ著作集　２　夜間飛行・戦う操縦士』、p.271
（７５）『サン＝テグジュペリ・コレクション３　人間の大地』、p.315
（７６）『サン＝テグジュペリ著作集　５　手帖』、p.44
（７７）『サン＝テグジュペリ著作集　４　母への手紙・若き日の手紙』、p.331
（７８）*Ibid.*, p.323
（７９）『サン＝テグジュペリ著作集　２　夜間飛行・戦う操縦士』、p.21
（８０）*Ibid.*, p.288
（８１）『サン＝テグジュペリ著作集　４　母への手紙・若き日の手紙』、p.299
（８２）*Ibid.*, p.183
（８３）『サン＝テグジュペリ・コレクション３　人間の大地』、p.213
（８４）『サン＝テグジュペリ著作集　５　手帖』、p.168
（８５）『サン＝テグジュペリ著作集　１０　戦時の記録　２』、山崎庸一郎訳、みすず書房、1988 年、p.193
（８６）『サン＝テグジュペリ・コレクション３　人間の大地』、 p.141~142
（８７）*Ibid.*, p.240~241
（８８）『サン＝テグジュペリ著作集　２　夜間飛行・戦う操縦士』、p.5
（８９）R・M・アルベレス、*op.cit.*, p.87
（９０）『サン＝テグジュペリ著作集　２　夜間飛行・戦う操縦士』、p.283
（９１）『サン＝テグジュペリ著作集　１０　戦時の記録　２』、p.196~198